翻訳にあたってのヒント

その１

拝呈、全翻協年末会参加者各位

　今回の年末会におきまして、板垣先生のほうから簡単な自己紹介をひとりずつお願いしたいということですが、私は即行スピーチが不慣れな手前、簡単にすますことにします。
その代わりといってはなんですが、年末会といえども全翻協主催による交流の場が勉強会であることに変わりはないということ、そしてよく調べてから発表に踏み切れるということで、この場をお借りしまして文書による発表をさせていただきます。この発表文に収録しました資料が皆様の翻訳業務に少しでもお役に立てばこの上なき喜びであります。　　拝　具

1996年12月22日

１．冠詞および単数と複数

　これらの、英語では厳密に使い分けられている用法であるにも関わらず、日本語ではあまり気にもされず曖昧模糊ないしは両義にもとれる場合が多分に見られる文法上の問題は、特に日本語を英語にする場合には非常に煩雑で厄介な問題です。総じて、定冠詞付き（その後で名詞が単数と複数になる）、無冠詞（名詞が単数形と複数形）そして不定冠詞付き（a ～）という、五通りの使い方があります。
和文英訳だけでなく、英文和訳をする際にもこれらの訳出には気をつけなければなりません。さらに無冠詞、不定冠詞、定冠詞が付いた場合や単数形と複数形で意味が変わってしまう名詞もありますので、翻訳する際にはよく辞書を引いて正確な訳出を心がけなければならないでしょう。

不定冠詞「a ～」：
「ある～」、「いち（一）～（one）」、「何らかの～」、「一種の～」、「何かの～」、「なにがしらの～」、「どれでも・任意の・不定の一つの～（each/any/every）」、「ある特定の（a

certain）～」、「ある種（類）の（a kind of/some）～」、「片方の～」、「ある特定の一つの（種類の）～」、「ある一定の数量の～」といった意味の他、「初出の場合（初めて話題にのぼる不定に人や物を表す時）」、「個別性を強調する場合」、「始まりと終わりがある場合」、「抽象的な響きを醸し出す場合」、「物体の正体が判明するだけで特定できない場合」、「～というもの（人）を表現する場合」、「ある（ちょっとした）出来事を表現する場合」、「個のイメージを出す場合」、「総称用法」というような用法があります。

I have a Mr. ～ here.　　～という方がいらっしゃってます（が）。

Give me a ～ or two.　　～を一つか二つください。

a Smith　　スミス家の人（メンバー／一員／家族構成員の一人）

（注：the Smiths の場合には、スミス家の人々［Mr and Mrs Smith and their child(ren)］の意味になります。）

an Edison　　エジソンのような人（one like Edison）／エジソンという人（someone called Edison）

Ｘ a ～　　～当たり（につき／で／に［once a month, etc.］）Ｘ（接続詞として使われ、each/per の意味）

an ear（eye）　　片耳（目）

an ordinary citizen　　普通の一市民

a comedy　　一種の喜劇

a science　　ある種の科学

Give me a smile.　　ちょっと笑顔を見せて。

I listened to an opera.　　一曲のオペラを聴いた。

a beautiful woman　　ある美しい一人の女性

a piece of cake　　日本語で言う、ショートケーキ／また「ペロリ、と平らげられる」ということから、「朝飯前」という意味もある。

a work of art　　芸術品（仕事の意味では不可算名詞ですが、作品の意味では数えられる名詞になります）

make an effort to ～ と make efforts to ～（前者が「～するためにある努力をする」、後者が「～するためにいろいろな努力をする」というニュアンスでしょうか。）

Give me an apple. と Give me the apple.

この文例では、八百屋へ行ってりんごが山で積まれている場合とりんごが一個しかない場合という事態想定をすれば察しがつくと思います。前者の場合は、「その中のどれでもいいからりんごを一個ください」ということで、後者の場合は「ある特定の、つまりそれしかない、そのりんごをください」ということでしょう。

I like a dog.　と I like dogs.

この場合は、前者が、「ある一匹の犬が好き」」という意味に思われます。後者の場合は、「犬というものが好きなんです、つまり愛犬家です」という意味です。

a glass of milk/a glass of water/a jug (or mug) of beer/a cup of tea /a cup of coffee

ここで気をつけることは、「tea」と「water」だけが「a tea」と「a water」という言われ方をしない、ということが慣用となっているということです。他の単語は、「a milk」、「a beer」、「a coffee」と会話ではよく言われますが、それは上述した句の省略形であって、正式には間違いだそうです。これらの事例は、常識的に考えれば一杯ずつ飲む訳ですから、個のイメージを会話でほのめかす用法であると思われます。

A (or The) giraffe has a long neck.

Giraffes have long necks.

この「キリンの首は長い」という例文は、どれも総称として使われるそうです。中でも無冠詞の複数名詞形が最も自然だと言われています。

You're a businesswoman *and* an artist.　あなたは、実業家でもあり芸術家でもある。

この文章は、学校文法のルールから言えば、「You're a businesswoman and artist.」となるのが正しい言い方です。しかし、ここでは「and」が斜体字になっていて、あえて学校文法のルールを破ってまでも「実業家兼芸術家」であることが表現されています。この「and」は、[nd]ではなく、[nd]と強母音で発音され、さらにストレスをつけて読まれ、強調する言い方となります。「artist」の前に付いている「an」は冠詞の普通用法の例外で、「個別性」を強調する用

法と言われているものです。

A child (= All children need/Any child needs) needs love. 子供［すべての子供］には愛情が必要である。（これは、同種類のものの代表として使われる単数名詞の前で使われる総称の不定冠詞です。）

a couple（一対）　a dozen（１ダース）　half a dozen（半ダース）　a eighth（８分の１）　a quarter（４分の１）　a score (20)　a million (100万)　a lot of　a great many a great deal of － 一定の数量を表す表現

※ 不定冠詞を付けない場合

advice, information, news, baggage, luggage, furnitureの前には、数えられない名詞（不可算名詞）ですので不定冠詞を付けられません。ただしこれらの名詞には、some, any, a little, a lot of, a piece ofなどがよく付けられます。（a piece of advice［一つの助言］、a lot of information［たくさんの情報］、some more furniture［もう少しの家具］等）

定冠詞付き（the ～[s]）：

「あの（その／この）～」の意味をもつ指定の働きの他、「二度目にあらわれる場合」、「名詞の強調」、「慣用的用法」、「限定・特定」、「世界中で一つのものの指定」、「the ＋ 形容詞/現在分詞/過去分詞で名詞を表す」、「強意・典型」、「総称用法」というような用法があります。

Give me the pen.　　そのペンを取ってくれるかい。

I like a book.　It is the book that was written by one of my favorite novelists.
私はある本が好きだ。その本とは、私の好きな（長編）小説家の一人が書き上げた作品だ。

I pat［or tap］him on the shoulder.　　彼の肩を軽くたたいた。(慣用形)
（あるいは、I pat (or tap) his shoulder.も可能。）

the Second World War II　　第二次世界大戦（World War IIの場合は無冠詞）
the Olympics（またはthe Olympic Games）
オリンピック（その中のある一種の競技種目の場合には、an Olympic eventとなる）

the day after tomorrow（明後日）、the following day（翌日）、the day before yesterday（一昨日）、the aforementioned ～（前述の～）、the following（下記）

the earth 地球　　the North Pole 北極　　（唯一のものを示す）

the rich 金持ち　　the aging 熟年者　　the chosen 選民（the ＋ 形容詞/現在分詞/過去分詞で名詞を表す）
－ ただし、この形は、その種類の人々全体を示すため、複数形として扱われ、動詞と代名詞を複数形で受けるようにします。

The whale is in danger of becoming extinct.（クジラは絶滅の危機にひんしている。）
　この形は、単数形の名詞の前に付けて同種類の動物や物の代表を表す総称的用法ですが、その～と受け取られかねない場合も考えられるため、無冠詞の複数名詞を使うほうが普通です。（クジラが出たところで、ある西洋人と日本人の小話を一席。If we catch whales, you get angry. But, we get hungry if we don't catch whales.）

　また、明確な訳出を行う上で、ある名詞が二度目かそれ以降にあらわれた場合には、「the ～」でやるよりは、所有格（つまり、my ～, your ～, his ～, her ～, our ～, their ～, its ～）を使った方が、「かかり」がはっきりする場合が多分に見受けられます。ただし注意すべきこととして、the boy's the uncle や my the blue book は誤りで、正しくは前者が the boy's uncle、後者が my blue book という形をとる、ということをあげておきます。

補　足 － 「指示代名詞」である「that」と人称代名詞の「it」
　これらの代名詞を日本語に訳すと、「それ」になり区別がどうもはっきりしません。これらの

基本的な違いは、「that」は指示代名詞であるため、眼前の具体的な物を指して「あれ、それ」と呼ぶ場合に使われます。「it」は人称代名詞で、人が指差して「あれ、それ」と呼んだものに再び言及したり、一度話題に上った物を指して「それ」と言う時に使います。例えば、What's that ？「あれは何ですか？」という問いに対して、Oh, it's a cockroach.「あ、あれはゴキブリです」などと応ずるような関係で使い分けます。また「that」は名詞を強意的に限定したり（例えば、「例の～／かの～／ああいった～」等）、副詞的に「あれ（それ）ほど」というような用法で使われている場合もあるので、日本語訳ではそれなりの注意が必要だと思います。
また皆さんご存じの通り、「it」は仮主語の働きをしたり、漠然とした目的語として使われることもありますので、必ずしも訳す必要がないという事例もありますので、文脈に応じて臨機応変に意味をくみ取らなければならないでしょう。

無冠詞（単数名詞形もしくは複数名詞形）：
「つかみどころのないイメージを表す」、「一般的で漠然としたもの」、「～という概念」、「～というもの（こと）」、「～の状態（様）」、「慣用的用法」、「固有名詞」、「物質名詞」、「概念的・一般的状態」、「総称用法」。

まず名詞について整理してみます。名詞には、（１）普通名詞（dog, table, etc.）、（２）集合名詞（class, family, etc.）、（３）固有名詞（London, Smith, etc.）、（４）物質名詞（air, water, etc.）、（５）抽象名詞（kindness, literature, etc.）の５種類があります。このうち、普通名詞と集合名詞だけが基本的に可算名詞（countable nouns）で、単複の区別が可能です。あとの三つは、不可算名詞で（uncountable nouns）で、単数の冠詞（a, an）をつけたり、複数形にすることはできません（ただし、可算・不可算の両方の形がとれる名詞はその限りではありませんが）。そこで次のような文例があります。A lot of risk comes with it.（それには大きな危険性［危険というもの］がつきものだ［伴う］。）この場合には、抽象的な意味ですので、複数形にすることはできません。しかし、Trucking seems to have its risks.（トラック稼業にそれなりのいろいろな危険［将来危険となり得るいろいろな要素］がついてまわるように思われる。）このような危険や困難の「具体的な事例」を意味する時には複数形も可能になります。このような複数形にされた抽象名詞を文法では「普通名詞化した」と言います。この形は、可算と不可算の両方の形態を取る名詞に見られる用法です。ただし、可算名詞と不可算名

詞の区別は、日本人である我々が完璧にマスターしているとは言いがたいので、その都度辞書で調べることが必要でしょう。（※ risk を引き合いに出したついでに、danger と risk の違いについて一言述べさせていただきます。まず、danger ですがこの言葉は、「危険」や「危険物」を表す一般的な語で、「危険そのもの」を指すのに対して、risk は今は危険ではないが、今後危険となりかねないものを表し、「危険となる要素や可能性」または「潜在的な危険性」を意味する語です。）

Men fear death.　　人間は死（というもの）を恐れる。どちらの名詞も総称）

go to bed（寝［入］る） go to church （教会に行く） be at work（［職場で］仕事中である）
ー いずれも慣用句用法。

I have no idea.とI have no ideas. 前者が「私には、まったく分からない。／私には、さっぱり分からない。」、後者が「私には、アイデアが一つもない。」と訳せます。

Michael Jackson's concert か、the Michael Jackson concert か？

前者が Michael Jackson を所有格にした言い方で、「マイケル・ジャクソンのコンサート」という意味になります。これに対して the Michael Jackson concert のほうは固有名詞の Michael Jackson を形容詞的に concert を修飾させたもので「マイケル・ジャクソン・コンサート」という意味になります。所有格にした場合も形容詞的に使った場合も内容的には同じなることが多いのですが、文法上の構造が違うため、微妙なニュアンスの違いが生じます。

まず、Michael Jackson's concert とは「マイケル・ジャクソンが所有するコンサート」で、通常「マイケル・ジャクソンが開く、マイケル・ジャクソンが出演するコンサート」のことで、マイケル・ジャクソンが主でコンサートが従の関係ですから、この言い方では冠詞をつけることがありません。一方、the Michael Jackson concert は「マイケル・ジャクソンの名前が付いたコンサート」のことで、コンサートが主でマイケル・ジャクソンが従の関係となり、冠詞が必要となります。またこの場合には必ずしもマイケル・ジャクソンが出演するとは限らず、「マイケル・ジャクソンを記念するコンサート」などの意味になることもあります。ちなみに、あのマイケル・ジャクソンと同姓同名のビール評論家の方がニューヨークで講演会を開いた時には会場

に入ってびっくり仰天、大騒ぎになったそうです！
（その時のタイトルは確か、"Michael Jackson in New York" だったとか）

不定冠詞付きと無冠詞（単複）の名詞のイメージがつかめる文例；
There was a noise.　　ガチャッ、という音がした。（ある雑音がした。）
There was noise.　　やかましかった。（うるさかった。）
There were noises.　　あちこちから（いろいろな）物音がした。（何回か耳障りな音がした。）

There was a silence.　　一瞬の沈黙があった。（一時［ひととき］の静寂があった。）
There was silence.　　静かだった。（静けさがあった。）
There were silences.　　何度も（か）沈黙の瞬間があった（ひっそりとした瞬間が幾度か見られた。）

意味が変わる名詞：
　light　　複数形や不定冠詞付きにすると「灯（あかり）や照明」、それ以外の場合には「光」等。
　voice　　複数形にすると「話し声や声域」、単数の場合には単に「声や音声」、不可算名詞の場合だと「発言権」等。
　paper　　無冠詞形だと「紙」、a paper の場合には「新聞」、「論文」、「文書」。
　value　　無冠詞形だと「価値」、one's values の形で「その人の価値観・考え方」。
　reason　　「理由」という意味では、不定冠詞付き、無冠詞複数形、定冠詞付き複数・単数形が可能で、無冠詞単数形だと「理性」や「印象」。

この他にも、単数形・複数形、定冠詞付き、不定冠詞付きで意味が変わる名詞がありますので、訳出の場合には、まめに辞書を引くことが大切でしょう。

冠詞についていろいろな視点から見てまいりましたが、私自身もはっきりと分かっている訳ではありません。むしろ、この機会に洗いなおしをしたいという気持ちに駆り立てられたということがこの問題に取り組んだ第一理由です。冠詞を付帯するかあるいは無冠詞（単数か複数かの判

断も含めて）にするかについては、未だに頭を悩まし、何十分も考えていることが往々にしてあります。冠詞の使い分けは、ネイティブの方でも文法に則ってというよりは、感覚や慣用で使い分けているといった方がよいかも知れません。ちょうど、日本人が子供でも「は」と「が」を見事に使い分けているのと同じようなものであるのと、英米人に冠詞の説明をしてくれとお願いしてうまく答えられない方がいたとしても、それは日本人が助詞について教えてくれと言われてとまどう方がたくさんおられるのと、さして変わらないように思えます。いずれにしても、和文英訳の場合には、語感の鋭いネイティブにチェックしてもらうのが最も無難な方法でしょう。